911.3
八

# 俳諧百一集

俳諧百一集

(10)

# 俳諧百一集序

越中康工選

歌は百人一首なり連哥は連哥仙なりとなるは
其事なり季と云は逢は物心なく心なく〳〵と慕ふ今茂
津多言此感乃なりは其みなりとの人と画き知り
師と作る友と老ふる河原を行く多迄を迄
俳友を加へ桜木のもとに心寄する事永宗
須は寿哉なり元文は宗鑑寛永は貞徳貞室春
は立圃幸頼季吐寛文は宗因かく世々は先達なり

之を聲一生の出ハ
眼前乃ものゝ
の有て数百乃齢を
芭蕉風の飯杜子西行と
の門人の去来有て寅悟
涼菟北枝各よく翁乃風雅
支考も風雅乃血脈を
の家ゝ
杉山の風流を
乃る
と
一句乃
や
乃意乃
初学乃人乃

桃青翁西風と
流行
ゝ
古今乃名師
其角丈草嵐雪
許六の文あり
附句
頃乃一人
乃
清穆自立乃古者
海内
造化乃神
奇眼力乃
世乃
奇
句乃
筆
古の
人

寶暦十四年甲申夏五月

八椿舎自序

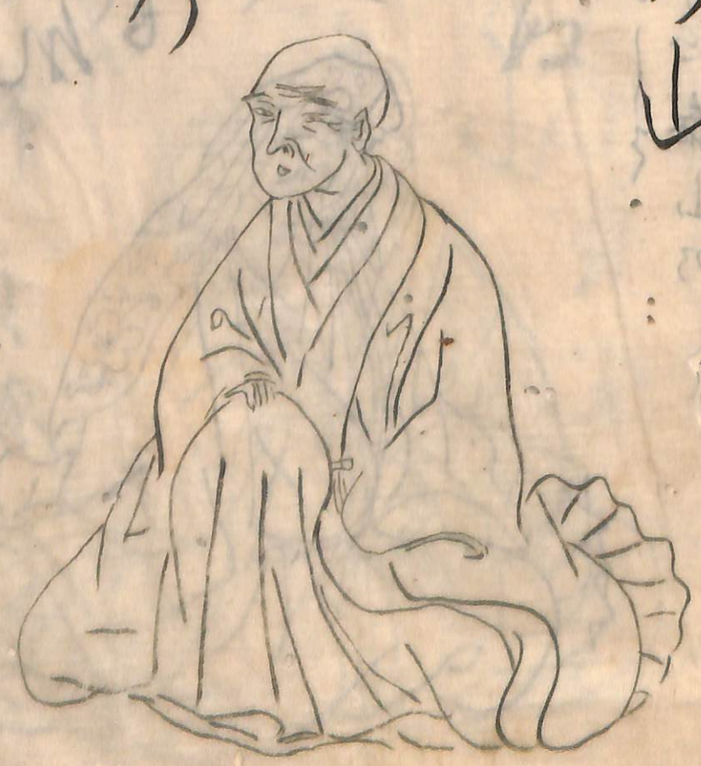
元和や
神代
乃
事も
思ふ
孚武

此神職や古代ゆ有りてく
此源を得考つ主

宮古乃山
宗鑑

物毋
乞
乃
元和
乃

今乃世をきくそを
世乃胡をるへし



望一

常小耳を用ひしを
其物を考へ耳心春山乃

月や

名家乃手法

貞徳

見ずと
さとり
花乃
山乃

妙境にのぞむ
芳野乃人乃目も奪
此一句小此山乃数景をつくす

貞室

一吹乃

立圃

師走乃
月乃
衣城

国月乃吹小しぐ
云也 衣帯世乃
調子をし

反歌

なつの形

重頼

梅

順禮乃

第五句上へ梅乃と
彩色只枯寄る
校乃ゝと奥の字

花乃

なつの形

季吟

一

詞殺とおりし意味ふかし
ほうの字を明春

僧と

富士の根の
師走
山
富士乃

湖春

一白乃塩梅ゑ四季乃
景色を
おもゑ
ゑ
ゑ

白雪や
茶ゑ
別
白
景色

宗因

為ゑ手乃物ゑ

稲妻や

さの字ハ

東

西

其角

秋乃秋乃かりゝ世乃さはを
安さゝ小 ゆゝや又心乃ひまゝ者人と
就 ひゝ者 ゆゝ者 ゆゝ者 ゆゝ者
恨 者 ゆゝ者 ゆゝ者 ゆゝ者
絶作

見龍

鳴

声小

半呵る

自我と眼乃前乃半ふ為りて
妙心を尤三重乃さゝ所者
人と勝を断しむ

東山

嵐雪

蒲團

象り乃深小しき誠乃
平安乃日東乃高度乃
海乃中乃

應くとくや

高乃

乃門

士云来

隨聞記十四
太州支考曲翠正秀其角許六おのく称嘆
の辺ゝ爰小略ス去来曰情ゝ蓼子ゝ自賛小
曰哲小自称ゝ寂乃乃ゝ
翁乃句ハ強ゝも弱ゝも得ゝ物乃
所ゝを皆ゝらゆむ乃ゝ

取つゝ如
ちゝて
らゝ
蛙
の形
大州

愛小かのまをとらをまてる
此人乃悟道をとゝまへ〳〵嗚呼

風乃
吹を
待り

一日

丹
乃星
涼
菟

有乃を小
きるをこゝ乃
形骨心をこゝ乃純也為
ゝんと胡とゝつしてゝ
まくや只自花乃ゝ

許可六

百尺乃竿頭つゝひとつ
ゆるる妙手哉

北枝

祈
繼ぎ
垣乃
此ものや
可き所を
よく示易
流りまふ

鄙坡

同
青葉
山

素堂
鍾愛乃吟り芳者乎妙ふて
之恨切乃絶頂へ

秋乃月　尚白

木ゝ

世を思ひ

紙ゝくゝ[illegible]物をおこたるふ
ゝね寅性をなまんきへ

[illegible]

秋

[illegible]

竹乃

[illegible]

杉風

淺き砂川

子もの
世を
今百
名月に

信德

雜談集ニ曰今年就中腸先斷
と白氏乃年を悲しむる意も
かなひて老乃まさめへしこそ
よもし さらちかけさる詞に

書面乃
さ
さ
時分
さ

鬼貫

行とれく者ものと真ニ小言外乃妙なり
書面乃 章 うの面七もし
ちまて八 時節乃事 毛出平常
本を文

風乃果を看て海乃音

言水

世ていふ風乃言水と称す則碍乃銘ふ殘せり

業なつ
素を
ちりつ
もみちは

木因

一笑

雨降

春乃雪

かゝる花乃かゝるを見てゆくゝ
又降り来る他意なし

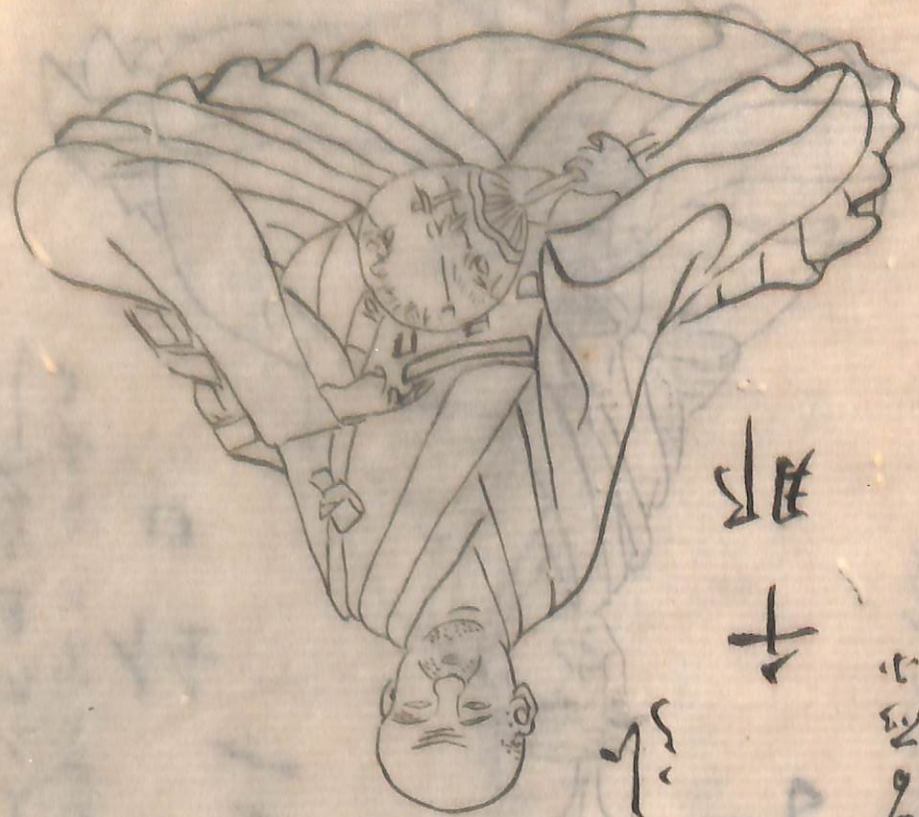
大くゝ乃
月をも
めて

七十二

任口

ちかくゝ八月をも
めて　昔乃金声小
仏くゝ七十二も刈　此上人乃年なりし
切花を求ゝて花乃衣なり

白鼠が本を喰ふ
鼠の本喰
ひかれ
ものを
ひかれ
本喰
鼠か



鼠か
ものを
ひかれ
ものを
ひかれ
本喰
鼠か

鼠が愛小日のものをひかれ
ものをひかれ
鼠と一緒に
鼠の

月桂の名所 紅露川

海乃

分別と

心を討る及ぶ海原をこゝを月乃にゐを作る
彼都良香ゝ
二千世界眼の前に盡と
御ゝ名をひく

枯竹や

長崎

二三年

方子

安くと入て喜味石渋
海棠ゝ香竹ゝ金柿ゝ酸ちさ

秋之坊

尼智月

麻からば
踏とる
宵戸
の
月見の形
浪化

市無禅に似て樗氏乃意乃上人乃為悲を称ふし

秋乃風
ふる
こゑ
かな
行灯や

正秀

殺生乃罪よりみちちのうめ
秋風乃あり毛一入ふしく

うとやま

ほとゝぎす

切

時

猫乃恩

越人

浪化君乃閑書小口
定家ゝ乃
うとやまし　せとも見うたに
の猫乃とゝ　つゝふるゝ

尼芳樹

板ゝ那

秋乃

月

燒ゝ

菊乃ゝや

俳門小ゝ乃ゝ乃ゝ乃
春白まゝゝん二章ゝとの恋とほゝく
俳諧次ゝ

野水

隨聞記ニ曰
[illegible]
なくてそ人を[illegible]
是ニ仍て

八習良

雨秋

蓑乃

[illegible]

牛乃角
蜜書
入
分
梅の実や

梅乃はなの実紅玉はしる
下ゝ十日をかゝる

句空

秋乃雨
こゝの
事積
下京や

凡兆

浪化君乃角書乃曰上ゝ
玉ゝ乃ゝを菊乃ゝ
乃ゝ諸乃ゝ

その
是式部ノ足悟真董ある〜〜
手毛と乃をふしてく誰ノ足をおもかさん
四角な
月も
天秤乃
友吉
月も四角なかけもとなる
とろ光もちみくとりんうと秤乃
一作よく田毎とろるくとやいりん

けり

時雨乃

紅葉

日枝まても

孤木子由

哀風景かもし話ふ事へて

心なんとかく彩る山西郎

水乃音

川中

木道

春乃

夏乃

清涼や

宇陀法師小白河説小京曲才一乃勺之
後代和歌之麼英子
国を〻ゝ花乃糸口と子脇一〻遠色

業はくらしとおもふ

二水

花は何時も花をおもふ
時々歩まとまる才乃放逸も
むなしからず

男子

一枝

家孫子

乃

吉乃山とよ

歌人乃迷詠ふまゝ
歌人乃迷詠ふまゝ

秋乃松

和及

通り道

大若乃

[illegible]の句は流の[illegible]
松乃操乃古今[illegible]
妙味多し

[illegible]

重軌

[illegible]

世上小

花[illegible]

[illegible]

世の中を
救ふ思
身も
果乃種や

石易乃功ふるを心ゆく

すて

孝子
伝来
乃
和乃
と
め

風流小真ふ實行
世之人乃心を和ら和
志孝孝行なり

枯木
思ふ
日

梅乃美

虚有り實有り寂寄之

從吾

夕暮も
曙も
秋

鶏頭
美

巳静

秋乃夕乃なもつの比曙乃
たるまの毛かと鶏頭乃ふくの
句の姿とそのまゝ述べ高千そこ
たく乃清新をはしよう

雜三

消つ

石地蔵

地蔵を消ゝ
もてやと拾ふ
音取ふ
みハ又さゝ

鬼士

初霜や

霜氷とゝ
霜乃
老乃

涼しさ乃
ものの
哀や

神路
山

尼
素心

曉や
灰乃
中より
ふるる
淡々

世事の移るを中小
世實境の
ことハ

山路の秋

石物の思

哭く

雉子

司鱸

常も鳴く山路乃つまき
声をきゝ
〜よく聞寂ふ〜

輕く

比叡乃

きゝもせ

袷乃秋

舍衆

母と坊主子乃衆情を
別きき目賢連乃
昔もさぞ

桃乃花

ちらすな

鶯乃声小

鶯合乃かちとまと似る
いとまひあらす
ちらし物除し

春波

おもかけ

なるよて

梅乃

さてみい

素風

梅乃源しまと云
あしらう
黄霧乃威あり

千鳥なく
ひとり
人も
破れ
屋根奇巖みしら
剣もろ長
杜芙
春乃色
所々
細き
秋瓜
青柳や
曲節自在

千代尼

尼珈涼

白雨乃形容新り奇也

麻父

切切と不堪聞
都て是れ乃ち仏を求む乃至
八乃字乃偈を言外乃
所行を能信之

自然と物寂しく心面白

声乃
鈴や
秋の
雑子
岸虎

萩乃花
咲てちる
日も
乱れて
禹洗

萩乃花おもてハ
黄ニ乃裏ハ紅とい
ふ

菅乃根の
面洗ふ
や
花の波
生可
きけ者ゝ
目さまし

畑中子

芳野

神仙の部

左菊

麦林師乃評子

万山乃花八云に丹あり〳〵心感心不ガ
細工をつまをたるの迄色乃匂を寅宗と了〳〵

一つ乃と

灯

中丹

くまを

鳥醉

一點ノ漁燈香霄ノ中

灯火を
つくるまも
惜る星
夜乃
蓼太

雁なくなり田のうの色
心を淋しくする此秋哉

見風

侍賢や
雁なく
秋の中ゝ
月を
ちひ
拙雁なく
深き
くゝ
下みる
よく働
真ゝ
清
乃

春乃雨
墨や
染て
鳥
啼くくハ

涼袋

ちりくとハ雪乃霧と降なくら
百千乃声ゝ諸ゝ来乃ちるら
御ゝ感語渉ゝ

晩九

くゝ見
ふら
庚
竹田
義笠

対節乃音楽乃
ゆ曲とおもむき合せゝ乃
味霧り乃

世有

夕部鉢の吉事を
含て考異を別
作る法なるべし

封ト

相法ふとの書をとりしらべ
大象髮命り記けるなり

其汀

芙蓉

知音乃つゝしみうゝ
月夕乃ちゝくゝと移り芙蓉乃
なつかしのる趣ひを傳ふ作也

文琴

識り

乃ゐ世乃人を友とせ
琴流乃閑居乃さ為深き
忽ち琴を

初

夕

柳几

あハく秋乃さむしさもゝ又
おもしろ物み歩かりの書
対面乃風雅眼り乃さあしるとゝ

琴

門琴

葉

この和

大阜

よく四時乃変ふ
おもひ鏡をおもひ
冬ハ枯乃流りとゝ

柏原大夫
門琴
日ハ雲中乃月
龍
野
麥水
花乃ゝハ八葉八世乃人ホ
越向ゑ改
泥中乃蓮乃ゝ

# 卷阿

梅の実を洗ひけゝ
澗水東ニ流テ復向西
ぶと乃野哥

芳人

高乃松
ハても
積
何を
面白や

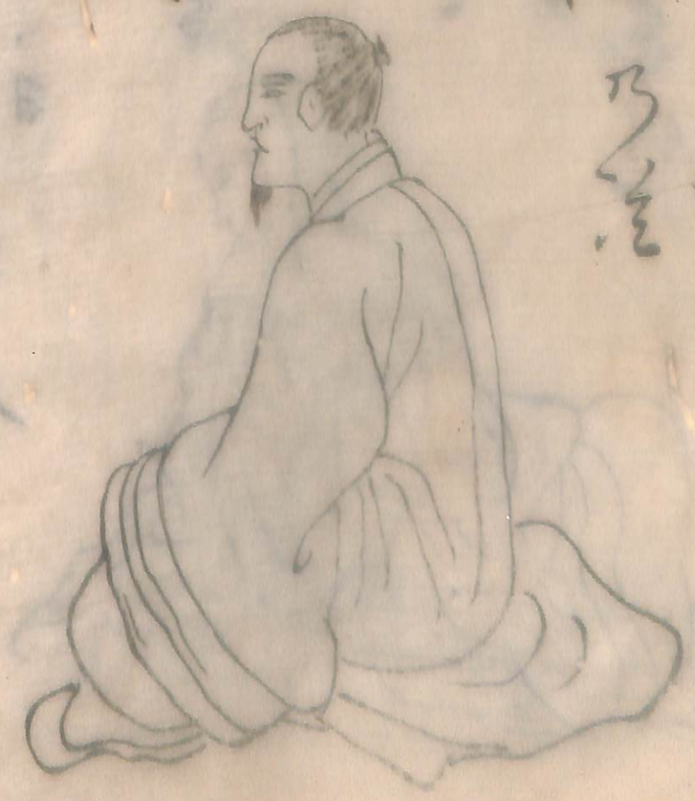
五色しよく五りゝ
風鈴九高

梅乃屋

中う

煙乃

山陰や



ふたりはのまく仏うさま
素晴さまと眼中小坊主

關吏

山茶花可枝

きれ

蟬乃

唱仏

中古乃風骨をほそそる

盡うて

於

江由

揺乃

戻る

君らハ

進退花ハ執心しく

おもて

うちかけ

やさしく

ふるまう

揺ハや

音乃

ふ

ハ

既

白

音とうたく先出山乃ふ

強ハ行ふ是その宗旨乃

対極ハ元分情屋

初稿

二ツ

四ツ

馬明

清水の松小仏
その上にて
蒙面乃星
乃四地をなる

神叩

或静

和吉

吉

三

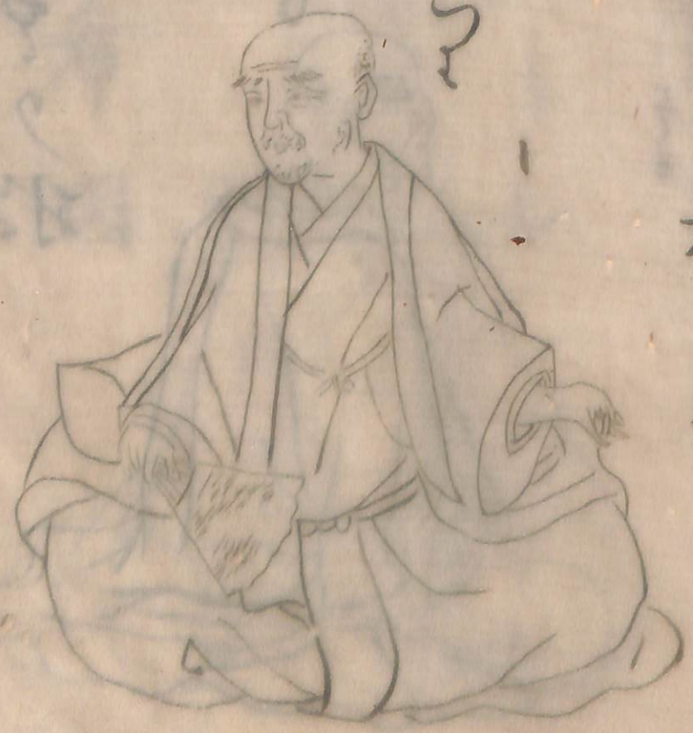
古

讀笑子彩色写生

梨乃花

康工

竹子



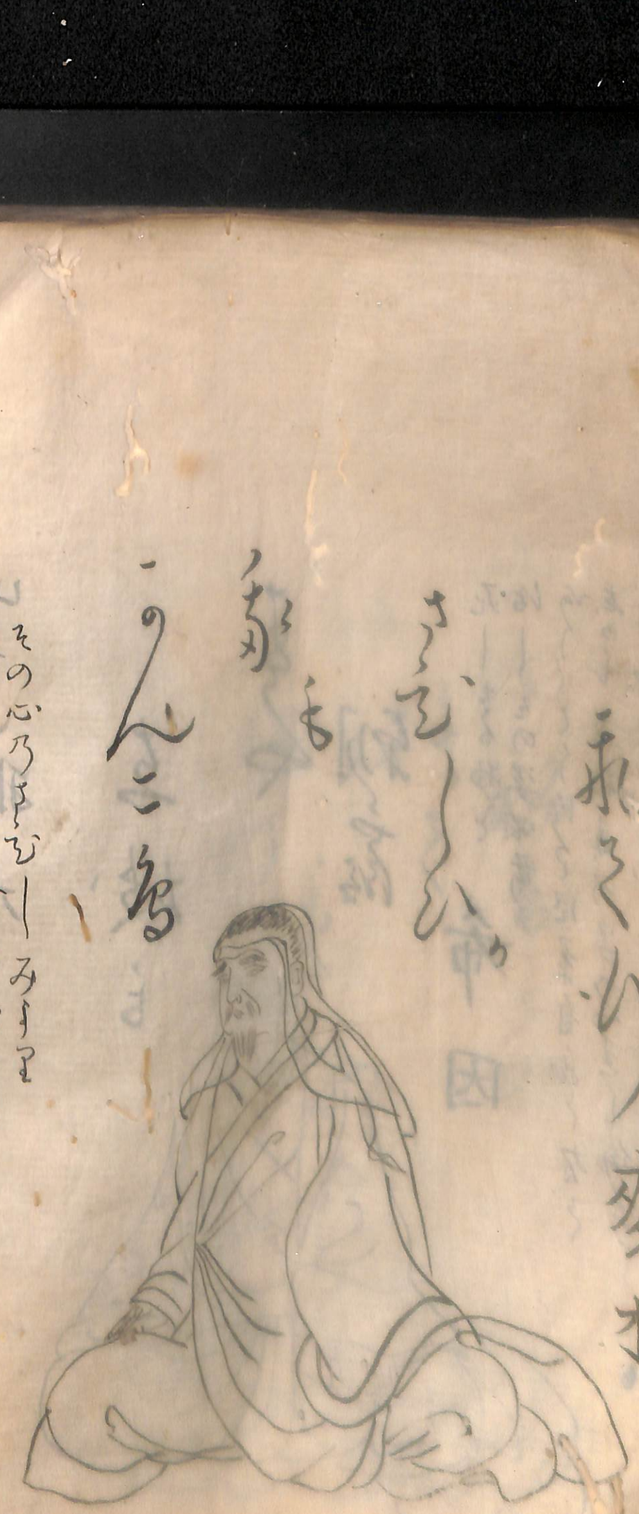
柳居

盧元

大事ハ言ひ方ニ寄ると
さ間違ひ易く言葉の
作り方ニ一字の新しへと
そならうせう

希因

死しまる物と
活しその姿眼前ニ
ゆゝとして活を居家自私と者と
志ゝ毛 立枝毒乃字乃毒も御手
使ハ中ゝ毒ゝ毒ゝ毒ゝ毒ゝ



麥林

# 諧林百一集跋

余嘗善諧之言洽而不厭簡而文亡立之次蓋原出于古國風變之來也尚矣繼作者人而桃青者興焉坎壈愈出愈奇噴ヒ而頌之夫性靈之發於天機者於稾

篇之旨哀呼
嗚呼嗚應寢現无
寃以陶冶性情發泄渣滓皇
之无裨於世道乎哉今斯
篇以无名生一亡生百而吹
萬不同如可知矣康工氏用
心而謂深於稾篇之功而躍
于治之中者余未知誹之至

矣者但知其簡而文淡而不厭
之者可善焉而已是為跋
語水叶散人書

明和二乙酉季四月

京寺町通仁王門下町
橘屋治兵衛梓